

山脇学園中学校

2023年度 入学試験問題

国語1科入試

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分間です。
3. 問題は□～□までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもたちは学校に通って、そこで、「注¹カリキュラム化された知」を学びます。その「カリキュラム化された知」というのは、この世界を再構成して縮約（縮尺）したものです。注²モレンハウアーは、学校のカリキュラム化された知を通して学習の形式を、「代表的提示（代理的提示）」（Representation）と呼んでいます。モレンハウアーの本の訳者である今井康雄さんの解説を引用しておきます。「そこでは子どもたちは、学校のような実生活から区別された空間のなかで、言語的・記号的に組織された知識を学ぶことになる。……子どもたちは、知の世界を通して現実世界とは何であるかを知り、こうして現実世界への参入が準備されることになる」。

生まれ育った身の回りの世界を超えて、広い世界で生きていくためには、子どもたちは、言葉や記号を通して、この世界がどういうものなのかを理解しないといけない。学校で教えられるのはそういう知なのです。だから、学校知は、いわば記号化された「世界の縮図」だといえるのです。（中略）

少し違う角度から学校の知の意義を話しましょう。一つ目は、経験は狭いし、経験し続けるだけでこの世の中のいろいろなことを学べるほど人生は長くない、ということなのです。

十九世紀ドイツの「鉄血^{注3}宰相」と言われたオットー・フォン・ビスマルクが、「愚者は経験から学ぶ、賢者は歴史から学ぶ」と言ったと言われています。正確には少し違うようですが、なかなか味わいのある言葉です。

① 愚かな人は自分が経験したところから学ぶ。賢者はほかの人の経験、

すなわち、歴史の中の誰かの成功や誰かの失敗、そういうものから学んで、自分の目の前のことに生かしていく。そういう意味の言葉です。

身近な問題を日常的にこなすためには、多くの場合、自分の経験だけで大丈夫かもしれません。しかし、身近で経験できる範囲の外側にある問題や、全く新しい事態にある問題について、考えたり、それに組みんだりしようとする、身近なこれまでの自分の経験だけではどうにもなりません。

たとえば、何年も商売をやっていると、商売のこつを覚えたりお客さんとの関係ができたりします。② 難しい言葉も文字式も、社会も理科も、そこには不要です。しかし、ある日、「今、自分たちの市で起きている再開発計画について、商店街のみんなでも対応を考えましょう」という話になったら、商売の経験だけでは対応できません。再開発計画の書類を手に入れて目を通したり、法令を調べたり、みんなで議論をしたりすることが必要になります。それには、経験で身につけた日々の商売の知識や注⁴ノウハウとは異なる種類の知が必要になるのです。日々の経験を越えた知、です。

A、会社に入ってからどこかの営業所にaハイゾクされて、一生懸命に頑張っていたけれど、突然、「東南アジアに行って、工場を造る責任者をやれ」と言われた場合を考えてみてください。田舎町での営業のノウハウでは対応できません。それでも、③ 今までは経験で身につけたことのない知が必要になります。

ジョン・デューイという非常に有名な教育哲学者が『民主主義と教育』という本の中で、次のように書いています。「経験の材料は、本来、変わりやすく、当てにならない。それは、不安定であるから、無秩序なのである。経験を信頼する人は、自分が何に頼っているのかを知らない。な

ぜなら、それは、人ごとに、また、日ごとに変わり、そして言うまでもなく国ごとにも変わるからである」。ある人が経験するものは、たまたまそれであって、偶然的で特殊なものなのです。

それどころか、個人の経験というのは、狭く偏っていたりもします。デューイは、次のように述べています。「経験からは、信念の基準は出てこない。なぜなら、多種多様な地方的もカンシユウからもわかるように、あらゆる相容れない信念を誘発するのが、まさに経験の本性そのものだからである」。

B、経験は大事だけれども、それはどうしても狭い限定されたものでしかありません。しかも、経験から学ぶというときに、経験の幅を少しずつ広げていくには結構時間がかかります。少しずつ経験を広げたり、何度も失敗したりするためには、人の人生はあまりにも時間が限られています。

むしろ、文字による情報を通して、ほかの人の成功や失敗がどうだったのかとか、ほかの人の経験がどうなのかということを学ぶのが、てっとり早く「自分の経験」の狭さを脱する道です。そこでは、単に文字の読み書きができるというだけでなく、学校で学ぶ社会科学や理科、外国語や数学の知識などが役に立つはずで、何せ、学校の知は**X**なのですから。

二つ目に話したいのは、知識があるかないかで経験の質は違うということです。「知識か経験か」という二項対立ではなくて、そもそも経験の質は、知識があるかないかで異なっているのです。

ここでも再びデューイの議論を紹介します。一つ目は、十分な知識があれば、深い意味を持つ経験ができる、ということです。デューイは、

同じように望遠鏡で夜の星を見ている④天文学者と小さな少年との違いを例に挙げて論じています。望遠鏡で見えている星は同じです。けれども、そこから読み取るものは全然違うということです。望遠鏡を覗いている小さな少年は、「赤く光る星がきれいだなあ」と思うかもしれません。しかし、同じ星を同じような望遠鏡で見ている天文学者は、「この光の色は、星の温度や現在の状況を伝えている。この星の色をどう考えればいいんだ」ということを考えながら星を見たりするでしょう。そこから、宇宙の謎が解明できるかもしれない。単なる物質的なものとしての活動と、その同じ活動がもつことのできる意味の豊かさとの間の相違ほど著しいものはない」とデューイは述べています。

これは私たちもよくあることです。たとえば、海外旅行でどこか歴史的な建造物を見に行くという話になったときに、歴史を知っているか知らないかで興味の持ち方や見方が全然違います。歴史を知らない人は、「大きな」とか、「古いな」とか、「壊れかけているな」とか、「人がいっぱいいるな」とか、そんなことを思いながら建物内を歩いています。それに対して、歴史を知っていて、なぜこの建物がこういう形で残っているか知っている人は、「あの物語に出てきたあの建物だ!」とか、「この柱は何やら様式で、何やら王が趣味で造らせたんだ」とか、そういうふうにしらべたりするのがまったく違います。同じものを見ても質の異なる経験になる。知識があるかないかで経験の質が違うのです。

デューイが言っている知識と経験の話でもう一つなるほどと思うのは、まだ経験していないもの、これから何が起きるかといったことを考えるために、既存の知識が必要だ、と述べているくだりです。

デューイはそれをこういうふうに書いています。「知識の内容は、すでに起こったこと、終了し、またそれゆえに解決され、確実であると考え

られているものなのであるが、⑤知識の關係する先は未来すなわち前途なのである。というのは、知識は、今なお進行中のことや、これから行なわれようとしていることを、理解したり、それに意味を与えたりする手段を提供するからである」。私はここを読んで、「ああ、なるほど」と思いましたね。

デューイが挙げている例は医者^{いしや}の例です。目の前の患者^{かん}の症状^{しやう}、頭が痛いとか喉^{のど}が痛いとか、^{注6}既往症^{じやうしやう}が何かとか、こういうのを全部総合して考えると、これはこういう病気でこれからこうなるから、そうすると投与^よすべき薬はこれだとか、そういうふうに考えます。そのことをデューイは、「直面する未知の事物を解釈^{しやく}し、部分的に明らかな事実をそれと関連して思い当たる諸現象で補充^{じゆうく}し、それらの事実の起こり得る未来を^cヨケンし、それによつて計画を立てる」と述べています。十分な知識があつてこそ、「目の前の患者^みを診る」という新しい経験に、適切に対応できるわけです。

同じように、われわれは、世の中のあれこれについての知識を持っていて、それを使って、現状を認識し、未来に向けた判断をするのです。知識は常に過去のもです。過去についての知識を組み合わせて現状^{せき}を分析し、未来に向けていろいろなことをする。これが知識の活用の本質です。そうすると、学校の知^ちというのは、そういう意味で意義がとてもよく分かるわけです。

(一部内容を省略しました)

【広田照幸『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』】

注1 カリキュラム化…教育内容を目的や段階に応じて並べること。

注2 モレンハウアー…ドイツの教育哲学者。

注3 宰相…首相のこと。

注4 ノウハウ…物事を行うための方法や手順に関する知識。

注5 二項対立…物事を二つの事からの対立関係でとらえること。

注6 既往症…今までにかかったことがある病気のこと。

問一 ……線 a 「ハイゾク」、b 「カンシユウ」、c 「ヨケン」のカタ

カナを漢字に直しなさい。

問二 [A]・[B]に当てはまる言葉として最も適当なものを、それ

ぞれ次のア～オから選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

ア ところで イ つまり ウ しかも

エ あるいは オ ところが

問三 ……線①「愚かな人は自分が経験したところから学ぶ」とあり

ますが、なぜ「自分が経験したところから学ぶ」ことが「愚か」なのですか。それについて説明した次の文について、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

*個人の経験は [1]ものでしかないので、それだけでは [2]に対応できないから。

(1) [1]に当てはまる言葉を本文中から七字でぬき出しなさい。

(2) [2]に当てはまる言葉を本文中から三十五字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問四 ……線②「難しい言葉も文字式も、社会も理科も、そこには不要です」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 商売では知識よりも人づき合いのほうが大事だから。

イ 日常の経験の中で身につく知識で対応できるから。

ウ 学校の勉強は現実の社会では役に立たないから。

エ 商売は知識が無くても誰でもできるものだから。

問五 ——— 線③「今まで経験で身につけたことのない知」を、すぐに手に入れるためにはどうしたらよいですか。三十字程度で答えなさい。

問六 Xに当てはまる言葉を、本文中から七字以内でぬき出しなさい。

問七 ——— 線④「天文学者と小さな少年」の例でデューイはどのようなことを示そうとしているのですか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 知識を持つ者も、知識を持たない者も、経験を通して学ぶという点は同じであるということ。

イ 知識を持つ者ほど、自分の経験を通して、より深い知識を身につけようとするということ。

ウ 知識を持つ者は、知識を持たない者のように純粋な気持ちで物事を経験できないということ。

エ 知識を持つ者と知識を持たない者とは、同じ物事に対する見方が全く異なるということ。

問八 ——— 線⑤「知識の関係する先は未来すなわち前途なのである」とありますが、デューイが挙げている医者例で「前途」に当たるものは何ですか。「～ということ。」に続くように、本文中から三十字以内でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問九 ——— 線「学校の知の意義」について、筆者は「学校の知」をどのようなものだと考えていますか。次の(1)～(3)の条件を全て満たすように説明しなさい。

- (1) 本文全体の内容をふまえること。
- (2) 「世界」という言葉と「経験」という言葉を必ずふくむこと。
- (3) 七十字以上九十字以内で答えること。

(下書き用)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学六年生の「わたし（町田良子）」は、習い事のバレエのオーディションと学校の修学旅行の日程が重なってしまい、学校での班決めの際に旅行に参加しないことをクラスメイトに告げた。すると、友達の坂巻さんが「行くのやめたって選ばれるかわからないのに」と発言するなど、教室が気まずい空気になってしまった。

葡萄牙色のレオタードとタイツ、それからオーディションのエントリーシートをレッスンバッグに入れた。迷ったけど、ぎりぎりのところでわたしはオーディションを選んだ。どちらかに決めてさえしまえば、もう気持ちはゆれない。捨てたことをミレンたらしくいつまでも考えるようなムダなことはしたくないし、①わたしはそういう人間じゃない。そう思っていた。

なのになぜだろう。胸の奥が落ち着かない。

バッグに入れたエントリーシートを取り出して、もう一度机の上に置いた。

わたしの夢はプロのバレエダンサーになることだ。ただの憧れなんかじゃない。

まへの教室では、家族で出かけるからとか、友だちの誕生日パーティーがあるからと、レッスンを休む子もいた。でもわたしは一度も、そんな理由で休んだことはない。足をケガしたときも、教室へ通った。レオタードを着て鏡に自分を映す。からだのライン、姿勢をチェックして、上半身や指の動きを確認する。レッスンはできなくても、できることもすべきこともいくらでもある。

食えることや着るものも同じことだ。バレエを中心に考えれば、自分

がすべきことはかんたんに答えが出る。

バレエはわたしを強くしてくれる。わたしをわたしらしく生きさせてくれる。わたしにとって、信じられるただ一つのものだった。ずっとずっと。

いつからだろう。友だちの存在がわたしのなかでほんの少しふくらんで、ママになにかを期待して、やってみたいことがぼつぼつと目の前にちらついて。

大切なものが増えたぶん、わたしは弱くなった。

ふつと息をついて、バッグのなかのエントリーシートを確認し、ゴムで髪を結わき直して部屋を出た。

「良子ちゃん、ちよつといい？」

レッスンを終わったあと、麻里子先生に呼び止められた。

「オーディションの申し込みなら」

「うん、周子先生からさっき預かったよ」

はい、とうなずくと、麻里子先生は「座らない？」と、スタジオの隅に腰をおろした。片膝を立てて、もう片方の足は足先を反対側の足の腿裏につける。背筋はピンと伸びたままだ。

麻里子先生は座り姿もきれい。わたしは両膝を立ててその足に両手をまわした。

つぎの時間は大人のレッスンで、もう数人がスタジオのなかを走ったり、エア縄跳びをしてウォーミングアップをはじめている。そうしてからだをアタタめてから、ストレッチをするのがレッスンまへの流れだ。

「修学旅行、行かなくていいの？」

「えっ？」

わたしが小さく声を漏らすと、麻里子先生は目じりをさげた。

「重なってるんだって？ 修学旅行」

まあ、とことばを濁らせた。

「でもめずらしいね、良子ちゃんが迷うって。ああ、誤解しないでね、わたしは迷って当然だと思うよ。そういうことじゃなくて。うん、良子ちゃんがどっちを選ぶか、悩めるようになったことって、わたしはすてきなことだと思ってるの」

「すてき、ですか」

うん、すてき。と麻里子先生は顔をくしゃつとさせた。

「迷ったり悩んだりできるって、それだけ良子ちゃんにとって大切なものがあるってことだからね」

「でも」

ん？ と首をかしげる麻里子先生に、② いいえと注₂かぶりをふった。

でも、大切なものをすべて手に入れるなんて都合のいいことは、できっこない。あれもこれもと手を伸ばしたら、きつと一番大切なものを失う。だから、一番大切なものを手放したくなかったら、欲張ってはいけない。

あれもこれも手に入れることができるのは、本当の天才と、一番をもっていない器用な人だけ。

わたしは A だから。 B から。だからほかのことは望んじやいけない。

……わかっていたはずなのに、どうしてあんなに迷ったんだろう。

「③ 野球ばか」

へっ？ と顔をあげた。

「野球ばかとかサッカーばかっていうじゃない？ あれってどんな意味か知ってるよね」

「野球とか、サッカーに熱中しているとか、打ちこんでいる人のことですよね」

麻里子先生は、そうそうとうなずいて、もう一つ、と人さし指を立てた。

「それしか知らない、その世界しか知らないっていう意味で使われる場合もあるの。ばかっていうのはいい過ぎだと思うけど、ある意味あたってるよね。たとえば、子どもがすごく野球うまかったとするでしょ。

そうすると、親も周りも期待するじゃない。末はプロ野球選手か大リーガーかなんてね」

と、目じりをさげた。

「そうなる勉強がでなくても、自己中心的で周りが引いていても、この子には野球があるから、特別なものがあるから、って放置しちゃう。

野球だけやっていればいいんだ、みたいにね」

麻里子先生は、すつと真顔にもどった。

「良子ちゃんには、そうなってもらいたくないな。べつに注₃ストイックに一つのこと極めていくことを否定しているわけじゃないのよ。そういうことが必要な時期もあると思う。けど、良子ちゃんは小学生だよ。いまから捨てるクセをつけちゃダメ」

そういつて麻里子先生は、ムダのない動きで立ちあがった。

「……修学旅行に行ったほうがいいっていうことですか？」

わたしがいうと、麻里子先生はにこつとした。

「もっとあがいてみたら？ ってこと」

エントリーはちゃんとしておくから、と麻里子先生はスタジオをあと

にした。

あがく。あがくってなにを、どうやって……。

日曜の朝、いつもの通り五時半に起きてランニングに出た。商店街をぬけて、落合川まで行き、川沿いの土手を走る。日中は真夏並みの暑さだけど、この時間はまだ風が気持ちいい。(中略)わたしはそのまま走って、坂間橋の手前から土手をおりる。^{注4}ルーティーン通り、四丁目公園でストレッチをしてマンションまでもどった。

「ただいま」

ママの部屋を開けると、ひんやりとした空気がこぼれた。エアコンの表示を見ると二十四度。ママは布団にくるまって、まだ眠っている。平日は朝ランから帰る頃には、もう朝食の用意ができていて、ママは仕事に行く支度をすませて新聞二紙に目を通していているけれど、休みの日はたいてい、十時過ぎまで眠っている。

「冷え過ぎはよくないよ」

サイドテーブルの上に置いてあるリモコンで、設定温度を二十七度に変えた。

ぬるめのお湯でシャワーを浴びてからリビングにもどると、キッチンにママがいた。ぼさぼさの髪に黒縁のメガネをかけて、完全にオフモードだけど。

「もう起きたの？」

「水を飲みだね。もう少し寝ようかな」

うん、といってわたしは髪を拭きながらテレビをつけた。

「あ、この事件」

チャンネルを変えようとしていたら、ママがテレビに目をやりながら

こっちに来た。(中略)

「^{注5}ママは、ちよつとわかる気がしたよ」

やめてよ、とわたしが顔をしかめると、ママは苦笑した。

「でも、あるんじゃないかな、だれにでも。自分だけ取り残されてしまうような不安を感じて、焦ったりさみしくなることって」

「そうかな」

「ママはあったよ。育休中に同僚が何人かでおcイワイに来てくれたときがそうだったな。みんな会社のことをいろいろ話してくれたんだけど、聞いているうちにだんだん自分だけ蚊帳の外、取り残されちゃう気がしてね。みんなが帰ったあと泣いちゃった」

ママはわたしを産んだことを後悔したってこと？ それって娘にいうことじゃ……。

わたしがだまっていると、ママは「やだ」と笑った。

「子育ては楽しかったのよ。みんなママのことをうらやましがってたし、ママも幸せだった」

「ならなんで？」

「贅沢、とはちがうな。うまくいえないけど、そうね、やっぱ置いていかれるんじゃないかっていう焦り。それから仕事に復帰したときに、自分の居場所があるんだろうかっていう不安かな。人ってそんなに強くないから、確かめたくなるの。自分が必要とされているかとか、愛されているかって。気持ちが弱いときほど強烈にね」

ふつと坂巻さんの顔が浮かんだ。

でもそれならどうすればよかったんだろう。友だちを不安にさせないために、わたしはオーディションをあきらめればよかった？ ムリ。そんなことをしたら、わたしは一生後悔する。後悔して、うまくいかなく

なったとき、坂巻さんのせいにしてしまう。そんな友だち関係になんてなりたくないし、なにより、わたしはそんな自分になりたくない。選ぶのも、決めるのもわたしだ。

「④わたし、人が考えてることなんてぜんぜんわからない」

「あたりまえじゃない」

ママはおかしそうに笑った。

「だから、ことばにしなきゃ」

「ことば」

「そうよ。お互い^{たが}にね」

ママはぼん、とわたしの頭に手をあてて「よし」と立ちあがった。

「ママはもう一寝入り^{ひと}してくるね」

月曜日。いつもの角のところに坂巻さんがいた。約束をしているわけじゃないけれど、三年生のときに同じクラスになってから、坂巻さんはここでわたしを待っている。「おはよう」と声をかけると、坂巻さんはほつとしたように「おはよう」と、わたしのとなりに並んだ。

「町田さん、金曜日はごめんね。あたしあんなこと思っていないのに」

歩きながらわたしが顔を向けると、坂巻さんはずっと視線をさげた。

「坂巻さんは応援^{えん}してくれてるって、わかってるから」

「ほんと!？」

「あらためていわれると、逆に^{注6}勘^{かん}ぐりたくなる」

「え、ちがうちがう本当にちがうから」

わかってる、と笑うと、坂巻さんも C。

「あやまらなきゃいけないのは、わたしでしょ」

「町田さんが？」

「修学旅行」

あ、と口を動かして、坂巻さんは数度かぶりを横にふった。

「わたし、修学旅行に行きたくないわけじゃないよ。みんなと行けば楽しいと思うし。あとで修学旅行に行けばよかったって後悔するかもしれないし」

坂巻さんはだまってわたしの話を聞いている。

「ドイツのバレエスクールとの合同公演会があるの、そのオーディション。受かったとしても大した役じゃないってわかってる」

「ドイツ？」

そう、とうなずくと、坂巻さんは D。

「わたし、どんな役でも舞台^ぶに立ちたい」

町田さん……と、坂巻さんは E。

「絶対受かるよ。合格する、町田さんなら絶対! あたし舞台観^みに行くから」

あんまり必死にいうから、わたしはうつかり笑ってしまった。

「ごめん、うん、観に来て」

そういったとき、バタバタバタと足音がした。「うりゃ」「まて!」と体操服袋^{ぶくろ}をふりまわしながら、^{注7}滝島^{たき}と細川さんが、わたしたちの横をかすめるように駆けぬけていった。

「ちよつと! あぶないでしょ!」

坂巻さんが、細川さんたちの背中に向かってどなった。

⑤ ああ、いつもの坂巻さんだ。

(一部内容を省略しました)

【いとうみく『ちいさな宇宙の扉のまえで』】

注1 ママになにかを期待して：母親に対し、仕事より自分を見てほしいという思いを口にしたたり、話を聞いてほしいと感じたりするようになったことを指す。

注2 かぶり：頭。

注3 ストイック：自らを厳しく律する様子。

注4 ルーティーン：規則的にくり返される行動や手続き。

注5 ママは、ちよつとわかる気がしたよ：テレビで放送していた事件の犯人の心情に対する言葉。

注6 勘ぐりたくなる：「勘ぐる」は、疑うこと。

注7 滝島と細川さん：「わたし」や坂巻さんのクラスメイトの男子と女子。

問一線 a「ミレン」、b「アタタ」、c「イワ」のカタカナを、

それぞれ漢字に直しなさい。

問二線①「わたしはそういう人間じゃない。そう思っていた」

とありますが、「わたし」がこのように感じるのは自分のどのような変化に対してですか。八十字以内で説明しなさい。

(下書き用)

問三線②「いいえとかぶりをふった」とありますが、このときの「わたし」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 麻里子先生から思いもかけない考え方を示されて、動揺しつつもその言葉の意味を深く考えている。

イ 麻里子先生の言葉に内心では強い不満を感じているが、言い返すことができずにもどかしく思っている。

ウ 麻里子先生の言葉は理解したが、自分はそうではないと信じているので話を切り上げようと思っている。

エ 麻里子先生の言うことは分かるが、自分はそうしてはならないと感じ、言いかけた思いを胸のうちにしまっている。

問四 A・B に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

- ア A 特別 B 一番がある イ A 凡人^{ぼん} B 一番がある
ウ A 特別 B 一番がない エ A 凡人 B 一番がない

問五 線③「野球ばか」とありますが、麻里子先生はこの言葉を持ち出すことで「わたし」にどのようなことを伝えようとしていると考えられますか。五十文字以内で説明しなさい。

問六 線④「わたし、人が考えてることなんてぜんぜんわからない」とありますが、「わたし」がこのように発言した理由について説明した次の文の1・2に当てはまる言葉を、それぞれ指定の字数で本文中からぬき出しなさい。

*母親の話を聞くまで、1 (五字以内)が、2 (十八字)を抱^{いだ}いていたかもしれないということを察せなかった自分に気付いたため。

問七 CとEに入る言葉として適当なものを、それぞれ次のア～ウから選びなさい。(同じ記号は二度使用しないこと)

- ア 足を止めた
イ まっすぐにわたしを見た
ウ 表情が少しやわらかくなった

問八 線⑤「ああ、いつもの坂巻さんだ」とありますが、このときの「わたし」についての説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 自分と他のクラスメイトへの接し方^{ちが}の違いから、坂巻さんにとって自分との関係が特別であることを感じている。

イ 互いの思いを言葉にして伝えあったことで、かたくなっていた坂巻さんの気持ちが緩^{ゆる}んだように感じてうれしく思っている。

ウ 先ほどまではおとなしかった坂巻さんの態度の変化に対しておどろきながらも、その立ち直りの早さに感心している。

エ 普段^ふ通りの大きな声を張り上げる坂巻さんの姿に、普段の威勢^いの良さを見いだして頼^{たの}もしく感じている。

問九 本文についての説明として適当なものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 麻里子先生の立ち居振^ふる舞^まいに目を向ける「わたし」の描写^{びよう}から、「わたし」が先生に憧^{あこが}れを抱^{かか}いていることがうかがえる。

イ 「わたし」の目から語られる相手の表情や仕草によって、その人柄^{がら}や気持ちの変化^{しやう}まで詳細に読み取ることができる。

ウ 胸^{むね}に抱^{かか}えている思いを自分に相談しない「わたし」を心配した母は、「ことば」にすることの大切さを「わたし」に説いた。

エ 「わたし」は、麻里子先生の言葉で自分のあやまちに気付き、母の言葉もあって、自分から坂巻さんに声をかけることができた。

オ 母は、普段はきちんとしているが、休日はそうではない面や弱さも娘に見せたり語ったりしつつ、「わたし」と接している。